コモンズとしての都市祭礼

長浜曳山祭の都市社会学

武田俊輔 ——著

縮小する地方都市の伝統は現代においていかに継承されるのか

近世以来の祭礼を通じて負担と名誉を分ちあう
「町内」社会の変容とダイナミズム、
観光や文化財行政を通じて編成される都市のネットワークを、
コモンズ論の視点から分析する気鋭の挑戦。

新曜社

コモンズとしての都市祭礼

長浜曳山祭の都市社会学

武田俊輔——著

新曜社

目　次

第Ⅰ部　課題の設定と分析視角

第1章　本書の目的と研究の視角……8

第1節　課題の設定　8

第2節　研究対象と分析の視角　13

第3節　本書の構成　32

第2章　都市社会学における「町内」社会研究の不在とその可能性……38

第1節　戦後日本の都市社会学における「町内」　39

第2節　都市社会学における「家」と「町内」社会　47

第3節　都市民俗学と都市人類学における都市研究　60

第3章　本書の分析視角――**コモンズとしての都市祭礼**……69

第1節　地域資源の利用と管理を通じた生活共同　70

第2節　コモンズ論からの都市祭礼へのアプローチ　77

第3節　分析視角――都市祭礼の構成資源の調達と用益の創出・配分をめぐる社会関係　84

第Ⅱ部　都市祭礼を構成する諸資源・用益と祭礼の伝承メカニズム

第4章　山組における家と世代――**祭礼をめぐるコンフリクトとダイナミズム**……96

第1節　山組内での祭礼の管理におけるコンフリクトの意味　96

第2節　祭礼における若衆たちの負担と祭礼の準備――A町を事例として　101

第3節　祭礼における家・世代間の負担と名誉の配分　106
第4節　積極的に楽しまれ創出されるコンフリクト　118
第5節　マニュアルなき祭礼の管理と伝統のダイナミズム　127

第5章　山組間における対抗関係の管理と興趣の生産・配分——裸参りを手がかりとして……133
第1節　複数の町内間における対抗関係の管理　133
第2節　裸参りの持つ意味とその手順　138
第3節　裸参りにおけるルールと喧嘩のプロセス　141
第4節　見物人の存在と対抗関係への作用　149
第5節　対抗関係の管理における暗黙の了解と協力　153

第6章　シャギリをめぐる山組間の協力と山組組織の再編……158
第1節　シャギリの調達を通した山組組織の再編　158
第2節　雇いシャギリの確保の困難と囃子保存会結成への動き　162
第3節　山組内でのシャギリ方の育成と山組の継承システムへの影響　168
第4節　シャギリを通じた祭礼の開放と人的資源の調達の変容　172

第7章　若衆たちの資金調達と社会的ネットワークの活用……176
第1節　祭礼における町内・町内間を越えた社会的ネットワークの活用　176
第2節　祭礼をめぐる資金の調達と若衆のネットワーク　179
第3節　協賛金獲得へのとりくみと用いられるネットワーク　181
第4節　協賛金集めの不合理性が持つ意味　186
第5節　社会関係資本の表象としての資金と相互給付関係、社会的ネットワーク　191

第8章　曳山をめぐる共同性と公共性——共有資産としての曳山の管理とその変容……195
第1節　曳山の管理と公共的な用益の提供　195
第2節　1980年代以前の曳山の管理をめぐる社会関係　201
第3節　中心市街地の衰退と曳山博物館構想の曲折　204
第4節　文化財という文脈の活用と曳山の管理をめぐる矛盾　214
第5節　公（共）的な意味づけを活用した共同的な管理　221

第Ⅲ部　コモンズとしての都市祭礼／地域社会／公共性

第9章　観光・市民の祭り・文化財——公共的用益の活用と祭礼の意味づけの再編成……226
第1節　祭礼の公共的用益への提供とその再編成　226
第2節　戦前期大衆観光の流行と祭典補助費——1924年～1937年　229
第3節　観光資源という文脈の活用と市財政への依存——1950年～1965年　231
第4節　協賛会の設立と財団法人化の挫折——1966年～1978年　236
第5節　文化財指定と複数の公共的文脈の併存——1979年以後　239
第6節　公共的な用益を通じた諸資源の獲得と地域社会における関係性の広がり　244

第10章　本書における知見の整理と結論……248
第1節　都市祭礼を通してみる社会関係とネットワークの変容　248
第2節　コモンズとしての都市祭礼　255
第3節　都市社会学に対する本書の意義　263
第4節　本書の課題と展望　270

注　273

近現代長浜曳山祭年表 299
あとがき 307
参考文献 325 (iv)
索引 328 (i)

装幀・加藤賢一

第Ⅰ部

課題の設定と分析視角

第1章　本書の目的と研究の視角

第1節　課題の設定

本書の目的は、近世以来の歴史を持つ地方都市（都市社会学における、倉沢進による古典的な類型で言うならば「伝統消費型都市」）、特にその都市を構成する名望家層の「家」を中心に構成された「町内」社会の社会構造と社会的ネットワークについて明らかにすることである。そのための手段として、「町内」自体がその担い手となっている都市祭礼を通じて見いだされる「町内」の社会関係、「町内」内部や「町内」社会間の関係性の性質、さらに「町内」社会を構成する人びとの社会的ネットワークや、「町内」社会と行政・経済団体との関係性や相互交渉を描き出す。そのことを通じて現代の伝統消費型都市の社会構造とそれを支える人びとの社会意識について明らかにするとともに、またその分析の枠組みを提示したい。

ここでの「町内」社会とは近世の城下町のうち商家や職人によって構成されていた町方、あるいは近世以降に発生した農村を巻き込んだ商品経済の発展の渦中において成長した在郷町（ざいごうまち）において成立し、それが変容しつつ現在までに至った都市社会である。本書は「町内」社会を中心に伝統消費型都市の社会構造について明らかにすることを目的にしているが、その際にまず町内会と対比する形で「町内」社会の概念を明確にしていこう。倉沢進

は津山市における火事の際の状況を事例に、「町内」を「地域の住民の相互扶助のまとまった単位、換言すれば地域的共同生活単位であって、火災のような共通共同の危機の相互扶助的な突破を担う」とする。町内会とはそうした「町内というもっと広い社会的な基盤があって、その町内という小社会の一つのエージェント」であり、主婦層（おなごしゅ）・青年層（若い衆）・老人層・子どもたちといった年齢階梯集団ごとにつくられた「年齢階梯組織の一つであるとともに、町内を代表する最高意思決定機関」であると位置づける（倉沢 1990: 11–12）。すなわち「町内」とは「地域的共同生活単位」、すなわちそこに生活する人びとが構成するコミュニティなのに対し、「町内会」はそのなかにつくられたアソシエーションの一つ（そのなかで町内を代表する、唯一の意思決定機関）に当たる。

倉沢は「本来町内をもっていた地域は、すべて商店街、あるいは職人町、江戸時代の言い方でいえば、町方の居住地」であったと述べる（倉沢 1990: 14–15）。そうした町内は「表通りに、間口3間なら3間、5間なら5間の店と土地をもっている」といった「土地持ち・家持ち層」と「裏店」に住む「浪人者やあんまや職人」、そして後になると「勤め人」で構成されるが、「町内のフルメンバー」といえるのはそのうち「土地持ち・家持ち層」のみというのが「明治以前から引き続いてきた町内のルール」であった。それが昭和期の銃後体制の確立のなかで変容し、区域内の全戸参加型の町内会という原則が成立したことを倉沢は指摘している。

本書において扱うのも、こうしたかつての「町方」を引き継ぐ「町内」である。もちろん、明治期以来の「町内」社会がそのまま現代まで引き継がれているわけではない。たとえば奉公人を抱えるようなかつての商家の経営を現在までひき続き行なっている商家があるとは考えにくいし、「土地持ち・家持ち層」以外に対するあからさまな差別も今では明確には行ないづらい。また従来であれば商店の後継者となっていた人びとの多くはサラリーマンとなって郊外に新たな住まいを構え、また進学や就職を通して大都市へと移動していった。さらに郊外での大型商業施設の増加とともに、従来の「町内」社会を構成していた中心市街地の商店の経営が悪化し、多くの

地域でシャッター通り化が進んでいったこともしばしば指摘されてきた。

しかし近世以来の歴史を持つ「町内」の社会関係とその歴史的性格は現在でも色濃く残り、そこに生活基盤を持つ人びとの生活を規定し続けている。都市の伝統的な共同が、鉄道や駅の建設による中心の移動、産業化、移住者の増加といったさまざまな状況によって危機にさらされ、それまで保持していた共同が地域社会全体のなかでは少数へと転化していっても、たとえば移住してきた人びとを排除したり選別して受け入れ、また地理的には離れた地域に住んでいる出身者についてはその内部に含みこむ形で、「町内」社会という枠は観念として維持されていった（松平 1990: 222-229）。現在でも、たとえば京都の祇園祭を担う山鉾町においてはマンションの建設を阻止したり、マンション住民のうち祭礼に対して熱心な一部のみを保存会に受け入れるといった限定をかける一方、地理的に移動した元の住民やその血縁については「通い町衆」として祭礼につなぎ止めることで、「家」の観念と「町内」とは維持され続けている（山田浩之 2016: 67-74）。その意味で現代においてもこうした「町内」社会、またそれを構成する「家」の観念は、こうした近世以前からの歴史を持つ都市について分析を行なううえで重要な意味を持っている。

こうした「町内」や「家」を軸とした社会関係の中核を構成してきたのが都市祭礼である。松平誠が述べているように、村落と違って「町内」は生産の共同にもとづく社会ではなく、それが一体となった形で生業に関連した生産物を生みだすことはない。そこにあるのは多くの異なる職業を持つ家の集団だけであり、共同を通じて発生するような村落の結合に対応するものを、自然の状態では生みだすことは困難であった。生業の単位はあくまで「家」にあって「町内」にはない以上、村落における入会地や生産に不可欠な共同の資源や財産、それらの管理を通して必然的に創出される社会関係も存在しない。そうした中での「町内」の共同として、松平は土木・衛生・教育・防犯、それに祭礼や冠婚葬祭の共同行為を挙げている（松平 1983: 33-34）。

そのなかでも祭礼は、「町内」を構成する各「家」が参加する、定期的かつ大規模な生活共同である。生産の

共同やそれと結びついた資源・財産がない「町内」においては、それに代わる共同の資源・財産として挙げられるのは町会所や神社、それに付け加えるならば祭礼に用いられる山車や道具などに限られる。そしてそれらを維持・管理するための金銭や知識をともなう共同行為、そしてそれらを用いた祭礼を通じてその「町内」の威信を外部に示し、また熱狂や興趣を創出することを通じて結合を発生させていく。

さらに祭礼は人びと同士の「町内」という共同認知を象徴的に構成し、またその内部における各「家」の威信秩序を表出する大きな機会であった。町内の生活組織と祭礼組織は全く同一であることはしばしばみられ、また祭礼における役職や等級が「町内」を構成する各「家」の経済力・政治力と、「家」同士の関係性、また「町内」の構成員をめぐる境界線をクリアに表出するシンボルとして機能してきた。加えて祭礼は「町内」の内部だけではなく、たとえば農村部の人びとが祭礼にともなう肉体労働や下働きの役割を担うことを通じて、「町内」とそれらの人びととの関係を示すものでもあった（松平 1990）。

とりわけ現代において「町内」を考える際、祭礼は重要な位置を占めている。というのは、こうした「町内」を構成してきた地方都市の持っていた、周辺農村部から人・モノ・金を呼び込むような経済的な中核性は戦後になって次第に失われ、中心市街地の商業的な衰退が進行するとともに、「町内」の領域から郊外へと住居を移動した住民も数多くなっている。そうしたなかで伝統的な「町内」は、松平が挙げているような土木・衛生・教育・防犯といった「住縁」という近隣性なしに行なえない生活共同以上に、祭礼を通じてその相互認知のあり方を維持するようになっている。先に祇園祭の山鉾町において地理的に移動した元の住民やその血縁を「通い町衆」として祭礼につなぎ止めている状況について触れたが、このような形で「町内」が維持されているのは、地方都市においても同様である。

そうした都市祭礼、そして日常的に少しずつ行なわれているその準備のなかで、「町内」に住まう人びとが「家」や「町内」という単位においていかに負担と名誉とをわかちあうしくみを創り上げているのか。そうした

枠組みをふまえたうえでの「家」同士や祭礼において役割分担を行なう世代間の関係、また異なる「町内」の人びと同士の関係はどのようなものか。「町内」社会の内部における「家」同士の関係性や、異なる「町内」同士の関係性は人びとによってどのように意識されるのか。郊外化や町内の領域における人口の減少といった状況において「家」や「町内」といった観念をいかに変容させつつ、人びとは祭礼を継続していくのか。本書ではこうしたなかで人びとが協力し、また対立しつつ祭礼という場を成立させていく状況、そこで交わされる日常的なやりとりからなる「相互行為の集合」（Goffman 1967=2012: 2）について、参与観察とインタビューを通じて具体的に描き出しながら明らかにしていく。

またそうした「家」や「町内」といった意識が確認される場としての祭礼を維持するために、「町内」が周囲の村落や行政、専門家といった外部のアクターとの間で関係性をどのようにとり結んできたのかについて、その歴史的な変容も含めて論じる。もともと祭礼に限らず伝統的な都市において、その周辺の農村部は商品作物や奉公人などの労働力の供給地であった。そうした関係性は祭礼の場においても見いだされ、たとえば祇園祭であればその山鉾の曳き手は、かつては近隣の農村部から雇われた人びとであった。祇園祭の場合は戦後の山鉾町と農村部との関係性の変化にともなって、山車の曳き手はボランティアへと変化したが、そのように祭礼を成立させるためにはさまざまな外部のアクターとの間に関係をとり結び、かつそれを時代の変化にあわせて更新していくこと、また複数の「町内」がそのために協力しあうことが必要となる。さらにこうした祭礼当日に必要な労働力だけでなく、都市祭礼を行なううえでは山車の維持や修理、技芸の継承といった複合的な資源の管理が必要であり、そのためには行政からの補助金や文化財行政、また専門家からの知識の供与といった、専門性をもった外部のアクターとの協力関係なくして祭礼は成立し得ない。地域社会をとりまくマクロな社会変動とそれにともなう盛衰に対応しつつそうした関係性を、「町内」の人びとが都市祭礼を継承するなかでどのように創り上げていったのかについても分析を行なう。

本書ではこのようにして、祭礼を成立させているさまざまな関係性、すなわち同じ「町内」社会を構成する「家」と「家」の関係や世代間の関係、また「町内」と「町内」の関係、「町内」社会と周辺村落との関係、「町内」を構成する個々人が祭礼と結びつけて動員する日常的な社会的ネットワークといった関係性を具体的に描き出す。と共にそうした集団間・個人間の関係性だけでなく、祭礼という場がそれなくしては成立し得ないような舞台装置、たとえば山車といったモノやそれを維持するために必要なメンテナンスを媒介として、「町内」の内外において発生するさまざまな社会関係についても分析を行なう。さらに現在の広く知られた伝統的な祭礼が観光資源や無形民俗文化財、ユネスコ無形文化遺産といった社会的文脈を付与されていくなかで、「町内」がそうした文脈にどのように向き合い、時にはそれをうまく活用して継承に役立て、時にはいかにそれにともなう制約と折り合いをつけていくのかを分析することを通じて、「町内」と行政・地域経済団体との関係性を描き出す。以上のように本書は都市祭礼を媒介として、現代の伝統消費型都市を構成する生活共同と社会的ネットワークについて具体的に明らかにすることを目的としている。

第2節　研究対象と分析の視角

本書において扱うのは、滋賀県長浜市の中心市街地を構成する「町内」である「山組」という地縁組織である。「山組」は近世以来の歴史を持つ「町内」で、毎年4月13日～17日にかけて行なわれる長浜曳山祭という都市祭礼の担い手であり、「町内」と祭礼組織は同一になっている。したがって祭りを担う単位の山組名＋町名、たとえば「月宮殿」（山組名）＋「田町組」（町名）の二つがセットで、「月宮殿田町組」というように合わせて呼称される。現在祭礼の中心となっているのは、12の各山組のそれぞれが共有する曳山という山車上の舞台において、6歳～12歳前後までの男児が演じる子ども歌舞伎（長浜では「狂言」と呼称するため、以下はその表記に従う）であ

り、各山組はその披露を通じて互いに競いあう（図1-1）。

後述するように、長浜は当初、豊臣秀吉によって開かれた城下町として数多くの商人が集められて栄え、江戸時代に城が破却されて以降もこの地域の中心的な商業都市、かつ琵琶湖の水運や複数の街道といった交通の要所に位置する宿場町、さらに門前町としても栄えた。明治期以降もいち早く鉄道を開通させて近畿・北陸・中京と結ばれ、また周辺農村部から人・モノ・金を集積する、この地域の中核的な商業都市であり続けた。商業以外の産業としては近世より彦根藩の保護をうけて「浜縮緬」と呼ばれる縮緬・ビロードの生産が盛んであり、近代以降も織物業で繁栄した地域であった。倉沢進による歴史的形成過程にもとづく都市類型に従えば、典型的な伝統消費型都市ということになる。

図1-1　狂言（子ども歌舞伎）2018年４月15日撮影

山組が位置するこうした伝統消費型都市の中心市街地は、戦後のモータリゼーションの進展やライフスタイルの変化を背景とした人口の郊外化、さらにロードサイドにおける大型ショッピングセンターの進出などによって衰退していったが、長浜もまたその例外ではなく、特に１９８０年代においてはシャッター通り化が進行した。この状況を大きく変えたのは地方都市におけるまちづくりの成功例としてしばしば挙げられる、第三セクター「黒壁（くろかべ）」である。もともと郊外で事業を営む非商業主たちを中心に設立された「黒壁」は、中心市街地に位置する明治時代の旧第百三十銀行長浜支店の建物を買い取り、そこを中核としてガラスを中心とした店舗展開を１９８９年より行なっている。その後、空き店舗を借り入れて修復し、テナントとして新たな商売の担い手を呼び込

むことを通じて中心市街地を活性化することで、長浜は地方都市の商店街の数少ない「成功例」としてみなされている（矢部 2000）。

ただしこうした黒壁のメンバーは従来からの中心市街地の担い手である山組とは重なっておらず、「町内」の一員ではない。黒壁の関係者の多くは中心市街地である山組の周辺部に住居・職場を構えており、事業の評価は高いものの、山組のような伝統的な中心市街地の担い手層ではない（矢部 2000: 53）。現在に至るまで、山組の中心メンバーは黒壁の経営者層とは重なっておらず、両者は異なる社会層に属している。とはいえこうした経済的な活性化の影響を、山組に属する従来の商業者たちもまた多かれ少なかれこうむっていることは確かである。

こうした長浜という都市の歴史と現状をふまえたうえで、以下では祭礼の概要と本書に登場する祭礼に関する組織について、またそれらについてどのような視点から分析を行うかについて説明する。

長浜曳山祭の歴史

長浜は小谷城を本拠としていた近江浅井氏が１５７３（天正元）年に滅亡した後、その旧領を与えられた羽柴秀吉が開いた城下町であった。秀吉は近江北部より農民、侍、奉公人、商人に至るまで徴集して強制的に築城工事に従事させ、城の東に碁盤状の町をつくり、在来の民家だけでなく、小谷城下をはじめとする周辺地域の商人を移住させた。１５９１（天正19）年には町人屋敷３００石の年貢米を免除する朱印地の特権を与え、さらに番匠・鍛冶・大鋸引（おがびき）・畳指（たたみさし）・鍋屋・塗師といった諸職人にも諸役を免除する特権を与えるなど、商工業者の招致に努めた。

徳川幕府の成立後、長浜は井伊直孝の彦根藩領となり、城郭は彦根に移されたが、その後も朱印地の特権は持続され、町屋敷年貢が免除されたほか、営業税や所得税が賦課されることはなかった。こうして長浜は商業的中心たる在郷町、また北陸と京大阪をつなぐ港町かつ北国道の宿駅という交通都市、加えて大通寺や長浜八幡宮と

いった多くの参詣者を持つ門前町としても発展していく（長浜市史編さん委員会 1999）。

さらに湖北の養蚕地帯を背景に製糸布産業が発展し、18世紀後半から19世紀初頭にかけてはそこから縮緬機業が盛んとなった。そして藩の経済的な中心としてその権力の強固な支配と庇護を受けつつ、京都などへの販路を獲得して浜糸・浜絹・浜縮緬・浜蚊帳・ビロード等の問屋制家内工業をも発達させていった。長浜の明治初期の戸籍簿の分析によると数多くの職業的使用人や徒弟奉公人を抱えた商家や手工業者が多数存在し、生産・商業都市として発展した長浜の状況がうかがわれる（西川幸治 1994a: 197–201）。戦後に至るまで長浜周辺の農村部の人びとにとっては、買い物や曳山祭、大通寺への参拝等で長浜に行くことは「浜行き」と呼ばれ、憧れのニュアンスをともなうものであった。

こうした長浜の都市としての発展を背景として行なわれるようになったのが、長浜八幡宮の長浜曳山祭である。この祭りは羽柴秀吉が長浜城主であった天正年間に長浜八幡宮の祭礼として始まった太刀渡りという武者行列に由来し、後に秀吉がみずからの男子出生の際に町民に見舞った祝金をもとに、各町で曳山と呼ばれる山車を造ったとされる。18世紀半ば以降には祭礼の中心は、曳山のうえで歌舞伎を演じるものとなり、現在まで引き継がれている。

山組組織を構成する家とその歴史の重要性

曳山祭は江戸時代の長濱52か町に基盤を持つ「山組」という13の地縁組織によって行なわれており、現在に至るまで各山組の領域は、一部の脱退した地域を除けば基本的には変わっていない（図1-2）。江戸時代に町人の自治都市であった長浜では、52の個別町のそれぞれが町代を中心とする町役人組織と町掟を持つ自治団体として運営されており、個別町の上部にテーマによって異なる町の組み合わせの連合体である「組」が置かれていた。山組はそうした複数の個別町を含んだ「組」のなかの一つであるが[1]、そのほとんどが明治以降は消滅したなかで、

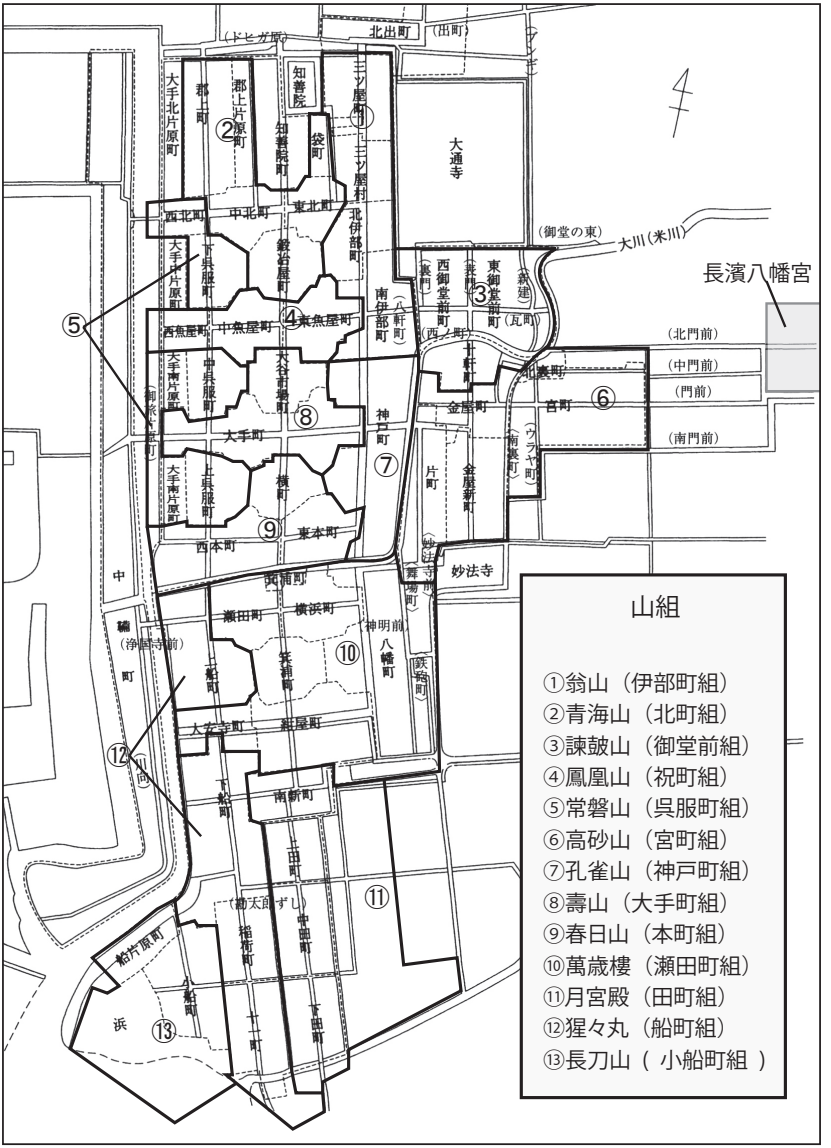

図1-2　近世の長浜町と現在の13の山組（町内）の範囲
点線は近世の町境界、太線は現在の山組の境界線
（長浜曳山文化協会・滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科 2012：14）

唯一現在まで引き継がれた「町内」の単位である[2]。祭礼においては山組のなかの個別町がローテーションで祭礼における中心的な役割を担うという「当番町」と呼ばれるしくみが設けられているが、現在では人口減少や少子高齢化にともなって個別町で祭礼を担うのは難しく、山組全体で分担して祭礼を行なうところが多い。

山組は個々人ではなく、そこに居住する家単位で加入する。山組のメンバーとして正式に行事に参加するのは、各家の世帯主である男性とその息子に限られる。女性は曳山（山車）に触ることは許されておらず、妻や役者の母親として男性のサポートを行なうが、祭礼自体において正式な役割が与えられることはない。唯一、祭礼における周縁的な役割である囃子の演奏について、１９７０年代以降に関わるようになったのみである[3]。

山組の成員資格は倉沢が述べる「町内」社会の特徴をよく示しており、多くの山組では現在でも、山組内での土地・家屋を所有している居住者・店舗の経営者が祭礼において中心的な役割を担う。現在では店だけを残して住まいを中心市街地の外に移す者も多いものの、山組の町内に店や家屋、土地を所有して祭典費を納め、労力を割いている家かどうか、またそうした家の血縁かどうかは、祭礼においてどのような役割をはたすかという点で現在でも基底的な意味を持っている。特に昔から代々町内に居住していた家はそれだけ金銭的にも、また労力の面でも祭礼により貢献してきたとみなされ、祭礼においてより高い威信を持つことが多い。また近年まで多くの山組では、各家が納める祭典費は間口割にもとづく傾斜配分になっており、現在でも一部にそうした山組が存在する。当然ながら、そこではより大きい間口を持ち、高い祭典費を納める家の方がより貢献度と威信が高いということになる[4]。このような「町内」を単位とし、祭典費の支出額や役職という形で組織編成において威信構造が示され、祭礼を通じてそれが強化・再編成されて「町内」の社会構成原理としてはたらくというしくみも、伝統的な在郷町に由来する都市において全国的に見られるものであり、その典型的な姿を示している。そうした点で長浜は、伝統消費型都市の「町内」の社会構造と社会的ネットワークに関する社会学的研究を行なおうとする本書の対象として最もふさわしいものと言えるだろう。

こうした威信は、長浜の場合はたとえば狂言の際にその家の息子が役者、あるいは山組を代表して八幡宮から御幣を受け取る御幣使に選ばれるか、また世帯主やその息子が重要な役職を任されるかどうかという形で示されるが、そうした貢献度と威信に対する評価は全員が必ずしも一致するわけではない。むしろそうした貢献度に対する評価と名誉の配分をめぐって、しばしばコンフリクトが発生する。

なお近年では中心市街地の人口減少にともなって、テナントを借りている自営業者、また他の町出身だが子ども時代に「借り役者」[5]として祭礼を経験したり、曳山の曳行の際に奏される囃子（以下では長浜での呼称に従って「シャギリ」と呼ぶ）を習いに来たことが縁で外から山組に加入した者、役者の親として初めて祭礼を経験した者、血縁者の友人なども加わるようになっている。そこでも祭礼に対する金銭・労力面での負担をどれだけ担っているかが、山組内における評価の対象となっている。

山組という町内は、30〜100軒程度の上記のような家を単位として成り立っており、その祭礼組織を分析するうえでは、そうした上記のような山組内における居住歴や貢献度とそれにもとづく評価・威信をめぐって競合しあう関係にある、各家同士の関係性を論じることが不可欠である。

山組における世代間の協力と対立

山組はいずれも男性の、狂言を担う45歳前後までの若衆と、曳山の管理・曳行や祭礼の進行、また他の山組との交渉を担ったり、後述する総當番（そうとうばん）と呼ばれる祭礼全体を統括する事務局に出席する70歳前後までの中老からなる。山組の組織については図1-3を参照されたい。

若衆の代表を筆頭、中老の代表は負担人と呼ばれる。山組全体を代表するのは負担人である。祭りのメインステージにあたる狂言執行を若衆のみで担う「若衆祭り」の山組と、中老も含めて行なう「総祭り」の山組があり、かつては若衆のみで狂言の準備を行なっていた若衆祭りの山組でも人数不足や時間的・資金的な問題から、中老